

“Absolution”―知性による現実の創造―

馬場 雅典

九州女子大学、共通教育機構 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2014年6月5日受付、2014年7月10日受理)

要 旨

小論は“Absolution”を*The Great Gatsby*の前触れと見なす論である。この作品はカトリック的要素を持っているが、この作品に関する作者の手紙が示しているように、作者は制度としてのカトリックを問題とするつもりはなかった。彼がカトリック的要素を持つ作品を書いたのは、カトリック性が時代の問題を含んでいると考えたからである。それはカトリック的絶対主義と世俗的相対主義の相克が時代の重要な問題であるという認識であった。Fitzgeraldは故郷ミネソタが生んだ全米的に影響力のあったJohn Irelandの行動と彼が高校から大学時代にかけて大いに影響を受けたFay神父の行動からこの認識を持った。

時代は1880年から1920年の間に「生産者」的資本主義から「消費者」的資本主義社会へと移行した。「消費者」的資本主義社会は一部の資本家に富や権力が集中しているアメリカの現実を見えなくしている。*This Side of Paradise*でFitzgeraldは社会主義的理想主義の姿勢を見せている。しかし、社会主義的理想主義ではアメリカ社会の病巣はもはや食い止めることができないという悲観主義をFitzgeraldは強めていく。その対抗策をFitzgeraldは初めて“Absolution”において示す。それは言葉による人間的な現実の創造である。

I

The priest gives the boy a form of Absolution (not of course sacramental), by showing him that he (the priest) is in an even worse state of horror + despair. (*Correspondence of F. Scott Fitzgerald* 212)

これはFitzgeraldがMr. Barretに宛てた短編“Absolution”に関する手紙の一節である。この手紙が一般に知られるようになったのはMatthew. J. Bruccoliの編集になる*Correspondence of F. Scott Fitzgerald*が出版された1980年以降のことである。

この手紙は短編の主人公が誰であるかを考える上で重要である。従来の“Absolution”研究では、“Absolution”は*The Great Gatsby*のJay Gatsbyの少年時代を描いたものだという作者の手紙を根拠にRudolphを主人公と見なした批評がほとんどであった。しかし、Rudolphを作品の主人公と見なす批評で作品の良さを納得させるような論は管見では見当たらない。Rudolph少年の行動に意義を見出すのは正しい解釈なのか疑問である。

主人公をRudolph少年ではなく、Schwartz神父とする論が上の手紙が知られるようになる1980年以前に一つだけあった。1973年にLawrence D. Stuartが書いた論である。Stuartは次のように言う。

Was it not Fitzgerald's intention to use the language of physical fulfillment in a mystical sense, to suggest the priest's permanent three o'clock in the morning? The priest desperately needs an object to symbolize his yearning to God, and finds it, ironically, in a glittering amusement park because "it won't remind you of anything, you see." (Stuart185)

神父が少年に語る言葉のなかの「ほかのものへの何の連想も生まない」というのはそれ自体で存在していること、つまり神の絶対性を表しているだろう。そのことは神への絶対的帰依を日夜念じている神父にとって意義深くあるだろうことは理解できる。しかし、神父が神への信仰と煌びやかな灯りに彩られた遊園地を同等とみなすとすれば、我々は神父の人間性を信じることができるだろうか。Stuartもこの2つを比較すること自体無理があると考えているはずで、だから「皮肉にも」と上で断っているのだろう。だが、Stuartはそのことの不自然さの解決を神父の純粋さに求めている。彼は“We know the amusement park is sordid, but we also appreciate how to Father Schwartz it is pure.”と言い(Stuart185)、*The Great Gatsby*のJay GatsbyとSchwartz神父の共通点をその純粋さに見い出し、“Absolution”を*The Great Gatsby*の前触れとみなしている(Stuart185)。

神父の純粋さという特徴は、作品の冒頭で際だって描出されている。世俗の世界によって感覚の平衡が視覚、聴覚、嗅覚的に乱される神父が描かれているのである。純粋さを保とうとする冒頭の繊細な神父は、次に少年の告白を聞いた後に作品の中で姿を現すとき、少年に向かって言葉で感覚に訴える方法で遊園地の楽しさを演出する。演技をするのである。この演技の陰に隠された意図を探ろうとする考察からすれば、Stuartのように究極的純粋さを神父に求めるのは作品解釈への抑圧になると思われる。

そういう作品の読みよりも、“Absolution”に関する先述のFitzgeraldの手紙文中の注釈が示すように、“Absolution”が儀式主義的な「罪の許し」をではなく、ある状況下における人間的な意味における個人の「罪の許し」、言葉を換えていえば、苦痛や恐怖からの癒しを扱った書と見なし、どういう癒しを語っているかを問うほうが自由な解釈の可能性を開くように思われる。筆者は、Schwartz神父の「恐怖と絶望」は作品に描かれた状況下における個人と社会の問題という我々の現実的問題に根ざしており、作者が作品への注釈に込めたものは、最終的には作者Fitzgeraldのメッセージを表していると考えられる。

本稿では、まず個人と社会へのFitzgeraldの関心を確認し、Fitzgeraldの場合、カトリ

シズムの影響があることを見る。Fitzgerald にとってのカトリシズムの問題を考察したあと、Fitzgeraldの社会観が、第1作の*This Side of Paradise*出版後から“Absolution”執筆までの間に悲観的になっていったことを確認する。この時期に社会主義的理想主義の限界をFitzgeraldに感じさせたのは戦後の消費社会の中に見いだせるアメリカ国民のナルシズムへの傾斜であったことを確認する。そして、“Absolution”のRudolph少年の意識と行動をナルシズムへの傾斜とそこから脱出の相克の危機として捉え、その危機の解決策として作者が提出しているSchwartz神父の行動の意味を述べることにする。

II

Fitzgeraldは彼が所蔵したJames Joyceの*Dubliners*の表紙の見返しの頁に“I am interested in the individual only in his rel[ation] to society. We have wondered [sic] in imaginary lonelines [sic] through imaginary woods for a hundred years---too long.”と書いている（Kuehl 57に引用）。個人が社会と接触を持たず、自らに強いた孤独の中で長い間生きてきたという2つめの文章は、Fitzgeraldの自身への認識を表しているだろう。この2つめの文章ゆえにその前の文章はFitzgeraldの強い社会意識を表しているが、その社会意識の内実は自らの社会の中での不安定感である。Fitzgeraldは自らの社会的地位に対する引け目を払拭できない主人公を、たとえば“Winter Dreams”のDexter Greenや*The Great Gatsby*のJay Gatsbyを筆頭に、よく描く。1933年に*The Saturday Evening Post*掲載の“More Than Just a House”を読んで、John O’Haraが成り上がり者を書かせたらFitzgeraldの右に出る者はいないと褒めた手紙（O’Hara 76）に返した手紙のなかで、父方と母方のそれぞれの家系が、自らを相手方よりも優れているとして鎬を削った家庭環境に育ったために自分には普通の人の2倍の劣等意識ができたと告白している。母方はお金を持っていることを自慢し、父方はお金はないが礼儀作法に誇りを持っていた。そのような家庭環境のなかで自らを社会的に定位することが難しかった（*Letters* 503）。

しかし、このような不安定な社会意識の要因はFitzgeraldの家庭環境のみならず、彼が育った場所と時代にも見受けられる。Fitzgeraldが父方と母方の家系が表しているという特徴は、アメリカのこの時期のカトリックに当てはまる。この時期のアメリカのカトリックにはリベラル派と保守派の争いがあった。保守派のカトリックは東部の都市部で栄えたのに対して、リベラル派のカトリックの地盤は中西部や西部であった。東部の保守派は周囲のアメリカ社会とは隔絶し、その影響をそれほど受けなかったのに対し、中西部や西部のリベラル派のカトリックはアメリカ社会の動向に影響されずに済むことはできなかった（Massey）。

リベラル派の代表は、Fitzgeraldの故郷ミネソタが生んだJohn Irelandであった。彼は1888年にミネソタを大司教区にして大司教になった（Reagan 19）。彼はThe Catholic Colonization Bureauを設立し、貧しいカトリックの農地購入に助力し、彼らを「アメリカ

での生活の本流」(“the mainstream of American life”)に引き入れたのであるが、この植民で鉄道会社が利益を得、Irelandは代理人としてその収益の10%を得た(Reagan 22)。彼はミネソタを西部への発展の東部の最先端と見なした。The Catholic Colonization Bureauによって利益を得たのであるが、Ann Reaganによれば、彼の植民計画がめざしたのはカトリックのミネソタへの入植者数を増やすことではなく、カトリックのアメリカ内の社会的地位を上げることだったようであるから(Reagan 22)、アメリカのカトリック界を宗教的な意味でも政治的な意味でも堅固なものにすることであったように思われる。

Irelandは最初ローマ教皇から認められるが、アメリカ国内のカトリックの分裂を恐れた教皇はローマ・カトリック教会の権威を主張し、宗教と政治の両立を目指すことでアメリカ国内のカトリック界の社会的地位を上げようとしたIrelandたちの運動は急速に終焉する(Massey)。以上のようなJohn Irelandの活動の歴史に先述の家庭内環境に育ったFitzgeraldが無関心であったとは思えない。John IrelandがFitzgeraldの意識に少なからずあったという証拠を筆者は見出していないが、John IrelandがJames J. Hill家と交際があり、Fitzgeraldの母方の祖母がHill家と交際があったことから、John Irelandのお膝元ミネソタで1896年に生まれ、父親の仕事の関係で各地を転々としたあと、1908年以降ミネソタで育ったFitzgeraldはJohn Irelandの活動の歴史と雰囲気を知っていたと考えてよいだろう。本稿で扱う“Absolution”ではJames J. Hillが重要な意味を与えられており、また、*The Great Gatsby*でもGatsbyの父親がHillを崇拜していることが出てくる。¹

ミネソタのカトリック界の指導者であったJohn Irelandの消長はFitzgeraldに社会的不安定感を印象づけた一要因となり、“Absolution”のRudolph少年の人物造形に寄与している。しかし、彼に影響を与えたもう一つの見逃しがたい個人的人間関係があった。当時、全寮制のカトリックの寄宿学校Newman Schoolの理事であったMonsignor Fayとの出会いである。Fay神父はFitzgeraldと社会的不安定感において似ていた。彼は一時、西部のNashotah Houseに勤めたが、のちに西部をあとにして東部に移り、ローマ・カトリック教に変節した。彼はJohn Irelandとは対照的に最終的に権威についた。

Joan M. AllenはFitzgeraldがFay神父に惹かれた理由を、Fitzgeraldが、自分の教会を辺境の田舎で階級も下のものとして感じ、そのようなものと同一視されなくなかったから、インターナショナルな雰囲気を醸し出しているFay神父に惹かれたと言っている。(Allen 22)確かにそのような要素はあったろう。しかし、Fitzgeraldの手紙から推し量ることのできる彼のFay神父の見方はもっと切実なものである。

Fay神父との付き合いでFitzgeraldのカトリシズムは深まりをみせた。Fay神父がモデルになった*This Side of Paradise* (以下TSOPと略す)のDarcy司教と主人公Amory Blainの初対面のときの会話は以下のものである。

“...you’re a medievalist,” Monsignor answered. “We both are. It’s the passion for classifying and finding a type.”

“It’s a desire to get something definite.”

“It’s the nucleus of scholastic philosophy.” (TSOP 101)

Joan M. AllenはFitzgeraldのカトリシズムの絶対主義を指摘し、その証拠としてFitzgeraldの*Ledger*の1915年2月の項の記述 “My sense of perfection. If I couldn’t be perfect I wouldn’t be anything.”を挙げている (Allen 31)。

Fitzgeraldはカンザス州のLeavenworth軍事訓練所からEdmund Wilsonに次のような手紙を送っている。

God! How I miss my youth---that’s only relative of course but already lines are beginning to coarsen *in other people* and that’s the sure sign. I don’t think you ever realized at Princeton the childlike simplicity that lay behind all my petty sophistication and my lack of a real sense of honor. I’d be a wicked man if it wasn’t for that and now that’s disappearing... (*Letters* 324 イタリックは原著者)

ここの「子供の素朴さ」というのは上の「完璧」をめざす絶対主義であろう。「他の者たちの(人生の)皺が陰しくなっていく」と言っているのは、物事の相対性を経験し、妥協する自分を習慣等によって堅固なものに見なす態度であろう。ここでFitzgeraldは自己も周りのことも相対的にしか見れなくなっていること、つまり絶対主義的価値観の維持が弱まりつつあるという自己意識を表しているのだろう。

この観点からFay神父(1919年1月10日死去)の訃報に接してShane Leslieに宛てたFitzgeraldの2通の手紙を読むと、Fitzgeraldにとって、Fay神父が宗教と政治をともに求めたJohn Irelandと同じ問題を体現していると思なしていたことがわかる。1つはFay神父逝去直後の1月13日付けの手紙である。

... He was the best friend I had in the world and last night he seemed so close and so *good* that I was almost glad — because I think he wanted to die. Deep under it all he had a fear of that blending of the two worlds, that sudden change of values that sometimes happened to him and put a vague unhappiness into the stray corners of his life. (*Letters* 374 イタリックは原著者)

この文面を読む限り、FitzgeraldはFay神父の恐怖、つまりカトリック的価値と世俗的価

値とを融合させる困難さ、いやそればかりかカトリックの価値観が世俗的価値観によって自分の中で逆転してしまうことへの恐怖を看取っている。また、そのような自己の不安から逃れるために神父は死を望んでいたという認識を示している。

もう一つはそれから約2週間後の1月末の手紙である。“[Monsignor Fay’s death] has made me nearly sure that I will become a priest. I feel as if in a way his mantle had descended upon me — a desire, or more, to some day recreate the atmosphere of him. I think he was the sort of man St. Peter was, so damned human.” (*Letters* 375)

イエスが十字架にかかる前に3度裏切るとイエスから予告を受けた使徒ペテロに比されて「本当に人間的だった」と言っている内容は絶対主義という宗教的価値と相対主義を強いる世俗的価値の間で揺れることは人間の性であるというFitzgeraldの自覚を示している。R. C. Neviusは、Fay神父は自らの変節の理由を陰謀があったからと言ったが、実は陰謀は彼の心の中にあったと、変節を個人の性格に帰すという、一種突き放した見方をしているが (Nevius112)、Nevius がFay神父の記述の根拠にしている著書の著者J. G. H. BarryはFay神父をもっと同情を持って、“Mr. Fay was the most perfect example that I have ever known of the “will to believe.”” (Barry Ch. XI) と語っている。BarryもFitzgerald同様Fay神父のなかに絶対主義と相対主義の相克という人間の性を見たのであると思われる。このようなFay神父の内面をFitzgeraldは“Absolution”のSchwartz神父の行動のなかに描いている。

Fitzgeraldはこのような自分の問題をTSOPで提示はできても、十分に描くことはできなかった。自分にとっての切実な問題をTSOPでは描ききれなかったという彼の判断は、*The Great Gatsby* (1925年4月10日出版) 出版後の1925年5月4日付けのH. L. Mencken宛の手紙文中に見いだすことができる。Fitzgeraldはそこで、次作の執筆には2年ほどを要するだろうと書いたあとに、“It’s about myself — not what I thought of myself in *This Side of Paradise*.” と書いている (*Letters* 481)。つまりTSOPで書いたのは「自分自身」とはつきり言えるものではなく「自分だと思ったもの」であったという判断を下している。そこで、Fitzgeraldはどのようにしてこの確信に到ったのかというのが次の課題となる。

III

TSOPの最後でAmoryが標榜するのは社会主義である。この社会主義の表明は読者に奇異に思えるかも知れないということは、作者自身が考えていた。というのは、第1次大戦後、Rosalindとの結婚の希望を絶たれ、懊悩の果てに母校Princeton大学へ向かう途上、自動車に同乗させてもらった資本家然とした中年男性に向かって、社会主義を奉じたのはこれが初めてであるとAmoryが言っているからである。しかし、実は、最後の社会主義の表明は突如出てきたものではない。大学時代にBurne Holidayの「大学内社交クラブ」(Eating

Club) 廃止運動にAmoryは同調したのである。

Amory が裡に抱いているのは社会主義というより、持たない側から見た反資本家的態度である。そして、その反資本家的態度の背後には、Burneの理想主義がある。それは『使徒行伝』で異端呼ばわりされ、石礫でユダヤ民衆に殺されたStephenの死がパウロをしてダマスカスから世界中にキリスト教を布教させたとBurneがAmory に語ったときに、Stephenの死の見方に込められている理想主義である。Fitzgeraldも大学時代Henry Strater による同様の運動に感銘を受けた (Brucoli 123)。アイルランド系カトリックとしてアメリカ社会のなかで不安定な社会意識を余儀なくされたFitzgeraldには自然なことであつたろう。

小説家Fitzgerald が裡に秘めていたこのような思想は、TSOP出版後、Princeton大学のHibben学長からTSOPのなかでPrinceton大学をカントリークラブまがいに描いているという苦情の手紙を受け取った際の1920年6月の返事に表れている。他者からの4回の懲らしめを通して主人公が悔悛し、社会に順応していく短編 “The Four Fists” に対するHibben学長の激賞に対して、Fitzgeraldは一晩で書き上げたもので教訓的なものにすぎないと言わざるを得なかった。同じ手紙文中の “[L]ife is too strong and remorseless for the sons of men.” (*Letters* 462)も “My idealism flickered out with Henry Strater’s anti-club movement at Princeton.” (*Letters* 462)も、Fitzgeraldの社会観を表している。そこから推量すると、Hibben学長のPrinceton大学をカントリークラブまがいに描いているという苦言と “The Four Fists” への激賞は同根であるとFitzgeraldは考えており、学長の人生観は社会のリーダーを自称する人間の自己満足の人生観だと揶揄していると見なしてよい。

このような人生観は “May Day” 執筆によってFitzgeraldに確認されたのではないかと思われる。この作品は復員兵が無残な目に遭う話である。そして兵士の犠牲の上に第1次大戦後、消費行動を謳歌するアメリカ社会の誕生が示唆されていると読める作品である。Lauraleigh O’MearaはMark Sullivanを引用して、アメリカの第1次大戦参戦に関して、アメリカの資本家たちが利益を上げるためにアメリカを参戦させたのが実情だと言っている。(O’Meara 26) “May Day” は資本家たちへの糾弾のみならず、戦時中禁欲的に耐えた自分たちに褒美を与えたいというアメリカ国民の欲求が資本家主導の消費社会を誕生させたという国民批判で書かれている。Gordon Sterrettが作品の最後でピストルによって自らの命を絶つので彼を主人公とみなす誘惑に駆られるが、上記のようなアメリカ社会の観察がなされていると考えると、Edith Bradinこそ最も注視すべき人物であると思われる。彼女の行動で最も衝撃的なのは、作品の終わり近くで、復員兵の一人Gus Roseを騒乱罪の犯人に仕立てる所である。Gus Roseが彼女の兄に大怪我を負わせたとは彼女は確信が持てない。ただ、兄の経営する社会主義系新聞社の事務所を暴徒が襲撃したとき、その場にいた1人がGus Roseであったことだけが彼女に確かなことである。しかし彼女はGus Roseを犯人に仕立てる。その理由をFitzgeraldは作品中で書いている。作品の前の部分で、彼女は戦前に恋人であったGordon

との再会を密かに楽しみにしてYale大学の戦後初の同窓会に出席するが、彼の惨めな姿に落胆し密かに愛想を尽かす。Gus Roseを騒乱罪の犯人に仕立てるとき、彼女は自分では気づかぬままに、自分の欲求を裏切った状況に対して自らの不満を晴らしているのである。つまり、その行為の根幹にはナルシズムがある。消費衝動に翻弄される戦後のアメリカ社会に作者はナルシズムを見たのである。

Fitzgeraldのこのアメリカ人観は1922年にUpton Sinclairの*The Brass Check*を読んでFitzgeraldのなかでさらに強まる。1922年1月にはEdmund Wilsonに*The Brass Check*を読んだかと訊ねているし、同年3月にはMaxwell Perkinsに“I think when I read Upton Sinclaires *The Brass Check* I made my final descision about America — that freedom has produced the greatest tyranny under the sun. I’m still a socialist but sometimes I dread that things will grow worse and worse the more the people nominally rule.”と書いている（*Dear Scott/Dear Max* 57）。Fitzgeraldは*The Brass Check*に書かれているような、金と権力を持つ階級がジャーナリズムや宣伝を利用して、アメリカ国民を見えない形で牛耳っていることを痛感しているのであり(Sinclair 13-16)、このような資本家たちの巧妙な支配に対して社会主義では太刀打ちできないという認識を示している。

秋元英一によれば、アメリカの経済は「1880年頃から1920年頃までがアメリカの「生産者」的資本主義から「消費者」的資本主義への転換期である。」(秋元150) Fitzgeraldは“May Day”のプロローグで、国民を消費生活に駆り立てるのに寄与した大きな力はジャーナリズムであると述べている。そして作中で、ジャーナリズムに翻弄され、消費衝動にナルシズムを満足させる人物を批判的に描き、ジャーナリズムに対抗する小説家としての責任を果たそうと試みた。しかし、そのようなアメリカ社会の悲観すべき状況を批判したが、それに対抗するものを提示しているとは言い難い。

IV

前節で述べたように、社会主義の背後にある自分の理想主義ではアメリカ社会の病巣に太刀打ちできないという認識を強めていったなかで、その病巣に対抗するものとしてFitzgeraldが自分の中に探ったものはカトリックの絶対主義の可能性ではなかったかと思われる。Fitzgeraldは次作の構想はないかとPerkinsに訊ねられて、早くも1922年6月20日付けの手紙で、“It will have a catholic element.”と書いている（*Dear Scott/ Dear Max* 61, 272）。Fitzgeraldは自分の中のカトリック性の問題をTSOPでも“May Day”でも、*The Beautiful and Damned*でも探ることはしなかった。FitzgeraldはMoran Tuduryへの1924年4月11日付けの手紙で新しい創作姿勢を探り当てたことを書いている。

I am so anxious for people to see my new novel which is a new thinking out of the idea of illusion (an idea which I suppose will dominate my more serious stuff) much more mature and much more romantic than *This Side of Paradise*. The B&D was a better book than the first but it was a false lead... a concession to Mencken... The business of creating illusion is much more to my taste and my talent. (*Correspondence* 139)

これは*The Great Gatsby*執筆直前の手紙である。この文面で「幻影の考え方から派生する新しい思考」という言葉でFitzgeraldが意味している姿勢で*The Great Gatsby*は書かれる。筆者は“Absolution”にその姿勢の前触れを見ることができると考えている。この観点から“Absolution”を読むことを通して、「幻影の考え方から派生する新しい思考」の何であるかを探りたい。

まず、“Absolution”で扱われている事態から見ていく。告解の席で嘘をつくという経験はFitzgeraldの11歳のときの経験である。Fitzgeraldはこの経験を“Absolution”で扱う前に、1度TSOPの前身である“The Romantic Egotist”で扱っている。

My religious experience was simply making my first confession of my sins. What made it religious was merely its form. What made it an experience, was that I told a gigantic lie....

“Have you told any lies my child.”...

“No, Father, I never lie!”

Immediately a sinking sensation told me I was doing it then, but I said nothing, from shame, and it was not for two years that I went frankly to a priest and told him all about it. I suppose my lie-of-lies was just out of me. It was a good speech and I couldn't miss it — but it kept me awake for many nights.

(“The Romantic Egotist” 276)

この一節には、神父に嘘の告白をしたあと、寝つけない夜を幾夜となく過ごしたこと、及びその後2年間という長きにわたって気にしていたというところに、神父に嘘をついた自分の行為に対して苦痛を味わったことを読者に印象づけようとする作者の意図を窺うことができる。Fitzgeraldは1923年にGellett Burgess宛の手紙でこのような執筆態度を批判する姿勢を示している。登場人物がセンチメンタルなのに反対はしないが、作家の執筆態度がセンチメンタルなのはいけない、自分も短編の創作姿勢でその傾向を有していると自戒を込めて言っている (*Correspondence* 137)。

“Absolution”のRudolphの自意識にとって最も重要な場面は、聖餐式を受ける資格として禁じられている水を実際には飲まないが、飲んだ証拠を残そうとするところを水を飲んだと父親Carl Millerから誤解され暴力による折檻を受けたあと、再度Schwartz神父に告解を受けるときに訪れる。

A maudlin exultation filled him. Not easily ever again would he be able to put an abstraction before the necessities of his ease and pride. An invisible line had been crossed, and he had become aware of his isolation — aware that it applied not only to those moments when he was Blatchford Sarnemington but that it applied to all his inner life. Hitherto such phenomena as “crazy” ambitions and petty shames and fears had been but private reservations, unacknowledged before the throne of his official soul. Now he realized unconsciously that his private reservations were himself — and all the rest a garnished front and a conventional flag. The pressure of his environment had driven him into the lonely secret road of adolescence. (“Absolution”88)

Rudolphの内面描写は迫真性を帯びている。だから、読者はRudolphの想念は妥当であると感じる。だが、作者はどのように考えているのだろうか。

V

Rudolphの内面のリアルな描写は、作品の他の細部とどのように関連しているだろうか。作品の冒頭で、アメリカの田舎の社交の場であるドラッグストアの内部はSchwartz神父の視線によって、“...the yellow lights shone inside and the nickel taps of the soda-fountain were gleaming.” (“Absolution”78)と捕えられている。この煌びやかさはRudolphの家庭の陰鬱な雰囲気と対照的である。しかし、Rudolphの家庭の台所描写は煌びやかさにおいてドラッグストアと共通している。

The kitchen was garnished with sunlight which beat on the pans and made the smooth boards of the floor and table yellow and clean as wheat. It was the center of the house where the fire burned and the tins fitted into tins like toys, and the steam whistled all day on a thin pastel note. (“Absolution”85)

司祭館の窓から見える小麦畑は生存のための糧を象徴するはずであるが、神父には「おぞましい」(“terrible”) (“Absolution”78)と神父は感じられる一方、一般家庭では上

のように「小麦のように清潔」と感じられている。Rudolphが苦境に陥って分身Blachford Sarnemingtonに成りきるときに感じる「おっとりとした気品」(“a suave nobility”) (“Absolution”83)も、物質的豊かさへの憧憬を表していると言える。

He was Blachford now for a while as he strutted homeward along the staggering road, but when the road braced itself in macadam in order to become the main street of Ludwig, Rudolph’s exhilaration faded out and he felt the horror of his lie. (“Absolution”83)

Ludwigという地名からは「ミュンヘンのLudwig伝道教会」が連想される。史実ではこの伝道教会からのアメリカのドイツ系カトリックたちへの送金がアメリカの司教たちのところで滞ったということである。そして、彼らはアメリカの司教たちがドイツ系カトリックへの尊敬の念を見せないことに不満を持ち、自分たちだけの保守主義に走ったということである(McAvoy 19)。FitzgeraldがLudwig伝道教会にまつわるこの史実を知っていたと思われるふしがある。Ludwigという通りの名前は管見では作品の背景である(North) Dakotaには見当たらないのが一つの理由であるが、Ludwig伝道教会にまつわる、上で述べた史実とRudolphの一致点が指摘できるからである。

Ludwig本通りは豊かな生活の象徴であることは明らかで、Rudolphは豊かな生活を享受する資格は告解の席で嘘をついた自分にはないと考えている。しかし、その直後その気持ちは彼から霧散する。

...Rudolph reserved a corner of his mind where he was safe from God, where he prepared the subterfuges with which he often tricked God. (“Absolution”83)

このような心理が、何よりも自分の「安楽と自尊心」を優先させようとする心理に繋がる。Ludwigの名前が連想させる史実におけるドイツ系カトリックの不満は作品におけるRudolphの不満と一致する。

それだけではなく、作者は何よりも自分の「安楽と自尊心」を優先させようとするRudolphに判断を下している。(同時にドイツ系カトリックの保守主義にも判断を下している。) Rudolphを苦境に追い込むきっかけになったのは、“Have you told any lies?” (“Absolution”82)という神父の抽象的な問いかけである。神父がなぜそのような問いかけをしたのかは一見謎である。しかし、作者は、「もはや2度とそうたやすくは自分の安楽と自尊心の要請よりも抽象的なものを優先させることはできまい」というRudolphの想念と関連させている。このように細部と細部を関連づけることによって、作者はRudolphが神父へ

の憤怒を内に閉じ込めたことを示している。以上から、Rudolphが自分の分岐点になると考えた内面描写はナルシズム的自閉の側面を持っていると考えることができる。

しかし、Rudolphの内面描写はもう1面をも表している。ドラッグストアやRudolphの家庭の台所描写の煌びやかさとともに、Rudolphの父親Carl Millerの作者による定義がRudolphによって想定されている「安楽と自尊心」を優先させる生活を説明している。

... Carl Miller had been incapable of establishing either with his superiors or his subordinates the reputation for approximate immutability which is essential to success in a hierarchic industry.... His two bonds with the colorful life were his faith in the Roman Catholic Church and his mystical worship of the Empire Builder, James J. Hill Miller's mind worked late on the old decisions of other men, and he had never in his life felt the balance of any single thing in his hands. (“Absolution”84)

ここで示唆されているのは、秋元の言う「生産者的」資本主義社会から移行し、新しく出現した「消費者的」資本主義社会である。その社会では実質というより外見が人事を左右するということが強調されている。父親のCarl Millerは、そのような新しい社会で、人間関係の微妙な側面に沿って生きるとき生じる、平衡感覚の損傷を補綴するのではなく、ローマ・カトリック教会とアメリカ社会の成功者James J. Hillに寄り掛かっている、精神の不活性を特徴とする人間である。² Rudolphが自分の分岐点になると考える内面描写はこのような不活性な精神への訣別を表してもいる。

以上見てきたことから、問題にしてきたRudolphの内面描写は、彼がいつでも精神のバランスを崩す要素を含んでいるとすることができるだろう。

VI

神父が少年に接する最終章で作者は、神父の行動を通してRudolphの問題の解決策を提示する。

前節で見たように、Rudolphは「消費者的」資本主義社会での生き方を一方で示すが、他方浅薄な「安楽と自尊心」への囚われを超える実存感覚を示す。Rudolphが彼の経験したことを語る時、神父は、その語りの中で、聖餐式で彼がRudolphに近づいていくと、「ルドルフは神の意志によって心臓の弁膜が弱まるのを感じた」(“Rudolph felt his heart-valves weakening at the will of God.”) (“Absolution”89) という反応を示したことを見逃さない。この文章は自らの「安楽と自尊心」を何よりも優先させ、社会との関係を絶とうとする自分の衝動が間違っていることを知っている少年の自己処罰の形をとった自己批判

である。少年の自己批判の知性は身体感覚にまで高められている。

神父はこのような知性こそ人間関係の基本であると考えて地域住民の教化に務めてきた。その努力の甲斐を少年のうちひしがれた反応に見た。だから、実際はあくどい商業主義に基づいた遊園地の催しであろうが、神父は少年の視覚、聴覚、味覚、嗅覚に訴えるような言葉で楽しい遊園地を現出させ、少年の恐怖を取り除こうとする。とりわけ神父が心を砕いていることを如実に示しているのは、Rudolph自身が嘘を言ったあと撤回しようとしたときに使った言葉“fix”を、“Does that fix it?” (“Absolution”92) という形で使ってRudolphを安心させようとする時である。神父は言葉の魔力を用いて少年の心の傷を癒そうとしているのである。

こうして、Rudolphは憤怒に支配される真の危機的状況から免れる。恐怖が取り払われた途端、神父は気が狂っている、変人であるという知覚がRudolphの意識の前面を覆うのは不自然ではない。Rudolphに刷り込まれている、父親に代表される大衆の価値観から抜けだす兆候を見せているとみなすことができるからである。だが、自分がどのようにして癒されたか認識しているわけではない。そうすると、このように「健全さ」を回復したRudolphが神父は変人だと漏らす危険性は大きいにあり、神父はこの地域の聖職を追われる可能性が大であるというのが客観的現実認識が語ることである。³

神父は気が狂っているどころかそのような現実が到来する可能性を客観的に見ることができている。だから、論の冒頭で引用した作者の自作への注釈のように、神父に絶えず去来する恐怖と絶望は客観的現実認識による。しかし、その客観的現実を超越しようとする姿勢を示す人物である。神父が抛り所としていると考えられるのは、Rudolphが成長して、彼を危険から救ってくれた神父の行為の真の意義を見出してくれる可能性である。それは、自らの「安楽と自尊心」を何よりも優先する衝動が間違っていることを少年が知っているという、少年の善を求める自己批判的知性を信じる神父の欲求に基づいている。

客観的現実を超える言葉による人間関係という現実の創造が神父と、そして作者 Fitzgeraldの姿勢であろう。客観的現実を現実とみなす立場からすれば、言葉による人間関係の創造という現実は「幻影」(“illusion”)であるが、それは人間の善性を信じる限りにおいて、堅固な現実であると言える。Gatsbyの少年時代の空想として、“...they[Gatsby's reveries] were a satisfactory hint of the unreality of reality, a promise that the rock of the world was founded securely on a fairy's wing.” (*The Great Gatsby* 77)と表現されていることはこのような「幻影」であろう。“Absolution”のSchwartz神父が最終的に我々に明かすヴィジョンは*The Great Gatsby*のGatsbyの核とこのような共通点を持つ。“Absolution”は*The Great Gatsby*の前触れと言える。

注

1. John IrelandはJames J. Hillの細君と知り合いであり、Fitzgeraldの母方の祖父はJames J. Hillの友人であった (Reagan 37, Piper 5)。

2. FitzgeraldはScribner社のRobert Bridges宛の1919年10月25日付けの手紙で、“...the public loves to find out the workings of active minds in their personal problems.”と書いているが、Carl Millerはこのような大衆として描かれている (Letters 141)。

3. 子供の言ったことが原因で大問題を引きおこすとは考えにくいということも考えられるが、この点に関してFitzgeraldはMaxwell Perkins宛の1934年7月30日付けの手紙で注目すべきことを言っている。Thomas Wolfeの *The Scribner Magazine* 掲載の“The House of the Far and Lost”を読んで次のように言っている。“What family resemblance there is between we three as writers (i.e. Fitzgerald, Hemingway, and Wolfe) is the attempt that crops up in our fiction from time to time to capture the exact feel of a moment in time and space exemplified by people rather than by things ... an attempt at a mature memory of a deep experience.” (Dear Scott / Dear Max 203-204) Rudolphが両親のもとでの生活に帰って行くとき、彼は精神のバランスを保つことに怠慢な環境に身を置くことになる。その停滞しがちな精神を見通す知性が「深い経験の成熟した記憶」であり、その「成熟した記憶」が捉えるのが、Rudolphは成長して過去の神父の行動の真実を理解するはずだという神父の抱く信念である。

Works Cited

- Allen, Joan M. *Candles and Carnival Lights: The Catholic Sensibility of F. Scott Fitzgerald*. New York: New York UP, 1978.
- Bruccoli, Matthew J. *Some Sort of Epic Grandeur: The Life of F. Scott Fitzgerald*. 2nd rev. ed. Columbia: U of South Carolina P, 2002.
- Fitzgerald, F. Scott. West III, James L. W. ed. “Absolution.” *All the Sad Young Men*. New York: Cambridge UP, 2007. 78-93.
- _____. Matthew J. Bruccoli and Margaret M. Duggan, eds., with the assistance of Susan Walker. *Correspondence of F. Scott Fitzgerald*. New York: Random House, 1980.
- _____. John Kuehl and Jackson R. Bryer eds. *Dear Scott/ Dear Max: The Fitzgerald- Perkins Correspondence*. New York: Charles Scribner’s Sons, 1971.
- _____. Andrew Turnbull ed. *The Letters of F. Scott Fitzgerald*. New York: Charles Scribner’s Sons, 1963.
- _____. “The Romantic Egotist” *F. Scott Fitzgerald’s Manuscripts I: This Side of Paradise The*

- Manuscripts and Typescripts Part 2* , Matthew J. Bruccoli ed. New York: Garland, 1990: 261-373.
- _____. James L. W. West III. ed. *This Side of Paradise*, New York: Cambridge UP, 1995.
- _____. Matthew J. Bruccoli ed. *The Great Gatsby* New York: Cambridge UP, 1991.
- Kuehl, John. *F. Scott Fitzgerald: A Study of the Short Fiction*. Boston: Twayne Publishers, 1991.
- Malin, Irving. “ ‘Absolution’: Absolving Lies” Jackson Bryer ed. *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald: New Approaches in Criticism*. Madison: The University of Wisconsin Press, 1982.
- Massey, Aaron J. “The Phantom Heresy?” <<http://are.as.wvu.edu/massey.htm>>
- McaVoy, Thomas Timothy. *The Americanist Heresy in Roman Catholicism, 1895 – 1900*. Indiana: University of Notre Dame Press, 1963.
- Nevius, R. C. “A Note on F. Scott Fitzgerald’s Monsignor Sigourney Fay and his Early Career as an Episcopalian,” Matthew J. Bruccoli and C. E. Frazer Clark, Jr. eds. *Fitzgerald/Hemingway Annual 1971*. Washington D. C.: Microcard Editons Books, 1972: 105-113.
- O’Hara, John. Matthew J. Bruccoli ed. *Selected Letters of John O’Hara*. New York: Random House, 1978.
- O’Meara, Lauraleigh. *Lost City: Fitzgerald’s New York* New York and London: Routledge, 2002.
- Piper, Henry Dan. *F. Scott Fitzgerald : A Critical Portrait*. New York : Holt, Rinehart & Winston, 1965.
- Reagan, Ann. *Irish in Minnesota*. St. Paul: Minnesota Historical Society Press, 2002.
- Sinclair, Upton. *The Brass Check: A Study of American Journalism*. California: Pasadena, 1920.
- Stuart, Lawrence D. “ ‘Absolution’ and *The Great Gatsby*.” Matthew J. Bruccoli and C. E. Frazer Clark, Jr. eds. *Fitzgerald/Hemingway Annual 1973*. Washington D. C.: Microcard Editons Books, 1974: 181-188.
- 秋元英一 『アメリカ経済の歴史 1492-1993』東京：東京大学出版会 1995年.

Rationally Founded Reality in “Absolution”

Masanori BABA

Division of General Education, Kyushu Women’s University

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi, 807-8586, Japan

Abstract

This paper is an attempt to regard “Absolution” as a precursor to *The Great Gatsby*. Although “Absolution” has elements of Catholicism, as Fitzgerald’s letter on this short story reveals, he did not have an intention to use the Catholic ritual as a means to show some remedy for the malady of the age. He wrote the story because he felt his own problem was the need to blend Catholic absolutism and the relativism that the modern age seemed to force him. He had the opportunity to observe the struggle of two important figures of that age, John Ireland and Monsignor Fay, and came to consider the problem not only as his own problem but also that of the modern man.

The age had changed from producer capitalism to consumer capitalism in the years between 1880 and 1920. America after World War I witnessed the coming of the consumption society, which would enable the capitalists in America to manipulate people and make them the slaves of their ruling power by fostering people’s narcissism. This was the problem that Fitzgerald had to grapple with as a writer. As a means to counteract this trend in American society, Fitzgerald contrives an idea in “Absolution” : “an illusion,” as Fitzgerald calls it, that creates the rationally founded reality of the goodness of man through the use of intelligence.